北條五代記　巻一

G 29
777

武陽こゝに夜のうさハおもふれぬそゝろにかしらの
霜ありて脊を夕陽にさらし衰世の興にふでをとき
びんやうの見聞せし事を書あつめて草双紙に三
十二冊ありしを見聞集となづけ侍れど絶て見
るに及事なくて草案のまゝ打すておきたるを今
気味をたづね侍るに我旧友なれば彼翁が家内
にいて此書を披見しけるに昔鎌倉の公方持
氏公永享十一年に滅亡ありしより以来
関東諸国みだれてしづまらざる事なく慶
長十九歳まで百七十二年世の移りかはり

見聞集巻一　一

0007828916

929/777

東京帝國大學圖書之印

B 34229

次第なりんぼく出た時代栄久を記しけり。扨
五代の内に北条早雲入道氏茂より氏綱。氏康。
氏政。氏直まで五代の弓箭の事われら。常。相州
の住人注事承しさに。北条家の沙汰どもりを
ゑらひ出し。今五十冊よわりめ一部とし。是を
北条五代記と名付ける。数十巻より抜出す。
我よみすれ。五代の次第おわりぬども。此書
の記とく。前後を知れまじ。今写し侍る者也

北条五代記巻第一目録

伊豆早雲平氏茂由来の事
関東天文乱の事
上杉朝成を生捕事
小田原北条家旗馬志るしの事
秀吉公関東発向の事
氏政へ道弓馬に達者の事

小條五代記巻之一

一　伊豆早雲平氏茂由来之事

中比ハ昔伊勢新九郎氏茂といふ侍他国より
来て伊豆の国を切とりしより伊勢八代とも
申説あり。但し是新九郎ハ京都より
駿河へ下り今川氏親をたのみ牢人分にてあ
りしが武略の侍なれば後に伊豆の国を切て
とりし也。老人物語を聞しに説々あり。されば聞き
しは江戸かよく辺邊の町人の噂をきゝたる日。
こそ事ぞといへば虚言のさた也。流江戸中の事とかや

も上年月をへて擾を成してそうる事とへバひそ
さまくに治るべしといへどもいかなる人も滅びたり。
乾坤も剣戟もとぞしがたく、たゞさ世がりさるとなく。
とにかく世の噂ハちかしかもわかれど、右の新九郎名を元
なる遊人なれバ、古き文に一言にておまきに事残し
あるとハ遍乱近年見出し、とき記を論記もある也。新九
郎後ハ北條早雲宗瑞と改号も。住国ハ山城宇治
の人也。又一説にハ、大和在京ともわりぬ。此人の先祖と為
またもの、伊勢の国に伊勢伊勢守平氏貞といふ

侍ありけり。小松内大臣重盛公より十三代の後胤なり。國
乃名をもわざたの上にて、事侍の名誉とたへけるを
比家故公方様に而若君わたらせ出来候ふと云へども。
短命にて十四歳にもならせ給ふ逝去し給ひぬと
なげきたまふ。しかも所に妄想に公方の先祖平
家とおぼしめし給ふか、何條しけふとも。桐乃けるに息子倉
なりしと、天下に申來ある平氏と云うて、世に家老と
ありしを治る臣を召しなひまはしてみれバくらく
長命なるべしと。殺されバ感悦なりしかしかども天
下のみ平氏の侍これいとひがひて…

伊勢の守ふ志てハわかしと。伊勢守と石のかせう
平家の子にし芝天下のまつりことを司出家は子孫
繁昌よさうへ給ふところ。中古まてもなくしわ主。
鎌倉の葛西谷にハ北條時政の屋敷代々北條家。居
住ともに高時。時行没落以後源尊氏公鎌倉にお
ちしまして。北威光ハみなかはさぬ所よりの当家よ
相の性異出来ともそれ事なしとそ召す
わわ給へハ、あしへか給ひし。平家の亡魂たちにと
なとし申おもそ。高時が屋敷の跡よ宝戒寺と
いふ寺を建立しておほくの平家の亡霊をとふらひ

高時と追善崇権現と号し。此寺の鎮守よいはひ
給ひくれバ、おそしてさしとまつりぬ。若伊勢伊
勢守ら給ひの時、在駿河の國主。今川五郎氏
親。京都へ上りし公方へ御礼申下國おる。伊勢ゐる
後の息女を申しうけ給ひ。子なし。こもなく駿河
為下り給ひぬ。然ルよ伊勢守後子息駿河守照康
と名付。照康の嫡男太郎貞次。次男新九郎氏茂
とおし二人の子息ありし。此まても京都の公方
相へ伺へり。然るよ此頃ハ此もなく例なしとて
まして此頃世ともにいよいよ他男なりしと伝

新九郎ハ関東へ下向の思慮をめぐらしけるハ。今川氏親ハ新九郎ためにハ伯母の夫なれバ新九郎を。駿河をたのミ下向ありて朋友むすびしとや。同道せんと。荒木兵庫。多目権兵衛。山中才四郎。荒川又次郎。大道寺太郎。在竹兵衛尉。伊勢新九郎とも七人ハ心を合。東国へ下向し駿河国に着しより。今川氏親と新九郎縁者なる故駿河におひて候る。義元親父の時代也。ことに今川家中に深執の侍にかくれなしと。早雲武略ありて。古に通治し七人の中にも早雲文武

智謀の人なる故に。今川の縁者となるによつて。浪人早雲と尊敬し。残六人も後ハ早雲の家老となる。早雲ハ伊豆と駿河のさかひ。高国寺に在城ありしに。此時上杉と云て。上州相州に居城あるて。関東流浪の棟梁なり。扇谷両人の中。不和出来そこらひける。折又堀越の御所と号し。伊豆の国北條にまします。然るに。小山豊前守。秋山蔵人と云て二人の家老ありしに。佞人の讒によりて。忠臣を切腹せしめ給ふ。此故に伊豆の国さハぎ。浪人の心ざしけるなれども。早雲駿河高国寺にありて。くハしく聞ても又

是天のあたふる所なりと。延徳年中小人数をそ
ろへ夜中に黄瀬川をこえて小田原によせみだれ
入所ハおもひの外とおどろき騒ぐ。遂に落城。大森
山へ逃げ給ひぬ。早雲ハ小田原に居住して近
辺の民屋を救ひ遠近を撫育し。国をうるほしければ。いよいよ
ひろまりそれ三津の松下三郎右衛門尉江梨の鈴木
兵庫助。大見の三人衆と号し。富永。梅原。木立衆
佐藤四郎兵衛。上村玄蕃。是等の者。在々所々より
てわれもわれもと降参いたし来て。早雲幕下
に付。眼目を掠さず御所とぞ称しさんと。大森山

ありせめのがれ御所ハ山を下り。會下寺にて切腹
し給ひぬ。其後関東よりそれ土肥の富永三郎右衛門
村田子の山本太郎左衛門。雲見の高橋将監
良の村田市之助なども。皆降参してこぞつて来て帰
伏となる。伊豆一国ハ三十日の中に。将遠なく治まり
らまで。是によりて右の代々氏直時代までも
在所を知行し居住す。御子新九郎北條と名字
事ハ北条のゆかりにて。系図をつぎしともいひ。三浦
大明神の霊夢のつげとも云ふ。扨又早雲と云子細
ハ若年より名付とりけり。明應のころほひ相模を

おさめ給ひ伊豆のにら山に在城のゆへ伊豆の早
雲とおほせらるゝいにしへは仁義をもつはらとし
こゝに民をあはれみ給ひ他人の國までもしたかひ
なつかせしと云事なし昔関東において早雲寺
殿なと人への状と号し小札わかきんと残さるゝ者を。
是とし爰にかしひきそへ申しこそ文よくよくしる

早雲寺殿二十一ケ條

一 第一佛神を信じ申べき事

一 朝はいかにもはやく起べし。おそく起ぬれば召つかふ者まで油断しつかはれず公私の用をかく

なる也。はたしてはかならず主君に見かぎられ申
べしとふかくつゝしむべし

一 夕には五つ以前に寝しづまるべし。夜盗はかならず子丑の刻に忍び入る者也。宵に無用の長雑談、子丑に寝入、家財をとられ損亡す。外聞しかるべからず。宵にいたづらに焼すつる薪灯をとりおき、寅の刻におきて行水拝し身の形儀をとゝのへ、其日の用所妻子家来の者共に申付、さて六つ以前に出仕申べし。古語には子にふし寅に起よと候へども、それは人によるべし。すべて寅に起て得分ある

ゐし。辰巳の刻を過ては。主君の出仕叶ふもなしぞ。又自分の用所とても。何の謂かあらん。日果もなかるべし

一 手水をつかはゞ先に厠より厩庭門外まで見廻り。掃除すべきを。部合の者にいひ付よ。手水をつかふにも。湯水を流しすてる事なかれ。水ハ大地なれバとて。おかくすてべし。捨べしと。家の内なれバとて。ぞうりたく数多くもつ事。人よりかつて祈るく安からし。ひそかに恐るべし。天に跼地に蹐すといふ事あり

一 稼ともる事。力のかぎりをつくし。直に

一 盗をしかよはね。正直憲法にして上をうやまひ。やまひ下をあはれむをバ。わすれざるとハわするべからず。なさとバ。片終をし何事のまゝならんや。佛の冥益も付ふとみてそうりたとひ。のがるとも此んおもふぞ。神明の加護あるべし。のがるとも心まかせ。天道にまかせさんと懐むべし

一 刃物家人の如く結構よろしくべしとて。もとへんぐしくなくとやくんめて。か地をかまへりしめ。無力かさなるまゝならバ。他人のわざなり成べし

一 出仕の時はやしみとよだれ。或ハあさ。松茸用意る

一　てんと目ハ前面によるべしとなりなれバ髪をバとかく
結ひなをしまいらせ座敷まて人〳〵によりて見ゆるの
童形又ハ元服之歳方によりゆるがせなれバ
召仕者までもすまひ相に嗜むべし。同じを
乃人の為縁其の中もさて何さまかりて見ゑ候
き事也

一　出仕の時は前へ参るべうとも、は次に祗候して
法傍輩式軒見ぬく汲ひ相ハさしもりハ左右へ
し。左様にかけまぐむもなく事なるべき也

一　結出さる事わしバ座をに祗候申しそうらはよ

一　鬼まゐ候くわけとは思事とや。座なでは前へ参りて
むへをく〳〵するまじく申も礼る敷べし。拇いさ組
の男と申調は其りの所のまくりにて上為し。礼の宏
狀を申しも組又事りより宗其事ハ何さ申

一　らんと口味あるへの内容を清くて上ぐべし。議
あ事なれど云事也

一　何さたら母く朔儀なれども他人のわるふに居べう

一　出。傍輩へ見るべし。一院稅方雑談座笑なりとして
の事わすれをもまたも傍輩もんへの
見頃らまへくも也

一 数多ましくて事なれと云事わるもの行す
と人にはならぬとくべきなり
一 少の暇もつらむて物のかりん文字の事物を懐にへ
前より人目を忍ひかんかまへ寝ても覚ても
忘れずまじ文字にてなり書事又同事
一 籠乱の身なれは紛に祖師の時勝をみておもて
ひとつきはまるへし。ちとかけね拵むくおもくてをと
なきし過る事以外の事なりと。法行何事も
慇懃よつてはすべきなり
一 上下万民に対し一云字句ももし處云とや
ゑしやうども、かくまでそめみを人にもしらるへし。處云
云付まだせくせりに敵でせてらるも也、へりに居てそ見
かざりて用へし、人に縁ありて一期の恥と心得へきなり
一 聖道なき人は無子より賤き事也。学すへし
言乃出云にくいしとるへし、云みくも人の胸
中心にみる者也
一 甲乙の家の児なりとも馬を宗なしふへし。不也地も達
者は宗習て用の仕の手綱以下は経を左右とすべき也
一 善友をもとめへし。手習学文の友也。悪友を
のぞくへし。碁将棋雙六の友なりと是は[illegible]

むごき恥母はなけれども。娘ても悪事母はなけれ
ども。組てはなりは光陰を送らんよりハと也。人への善
悪沙汰はよするといふ事也。三人行時かならず
わが師あり。善者をえらんで是を志さしむ。
ことよからぬ者をハ是をわしたむべし

一 と紀かて宿にゆかしむ。扉面にまうしへまうり。
垣根太のそで里取とふき紀抜さすべし。下
女によくさハ鋸を接て焼香座の事をわがる
ひ後の事を知らしむ。萬事かくのごとくなるべきさ
也。深くん好べし

一 夕には六ツ時に門をとざしてそれより人の出入かたくあらためけるさ
せべし。左様になくしては。油断よりてかならず
悪事出来るともへさせ也

一 夕には。火の用心中居の火入れ廻り。火廻り。かたく下
つけ是外に火の用心をかたく。毎夜申付べ
し。女房ハなることも賊もたれかの心得なく。家財衣裳
をとらして。男多くさる事也。人を召仕ひた。萬事を
人に申付べき事なれど。我とつとめて。内術を
知り後には人にまさするも。紀とんべさせ

一 文武弓馬の道ハ武士也。紀をとに及ばねど。文を左右にして武

と右にまとるハ古の法を通く傳へもじんハ先へりしもし
右の文を画だ見刻し事ぬれバ則是にもたるし
作る者也。者損揚湯付ハ早雲菴桃寺を立そ紀
納せ是を金湯山早雲寺と号せ。早雲ハ永正十六
年己卯八月十五日ニ逝去也。法名早雲寺殿天岳瑞
公大居士と名付。此寺異験ありて方々ぐ九の御旨を
下され勅願ちと号し関東第一の名寺也。下万
民よこぞるまで偶作のうへとさんこゝろをどとしふ
事たてし勅書ハいつく
当寺為勅願浄刹至仏法紹隆宜奉祈皇家再興

者天氣如此仍執達如件

天文十一年六月廿四日　左大弁

為早雲寺大隆禅師禅室

かのごとく此の霊寺なりといへども末代におよんで破却し
なにかくずれし尚是もむかし諸堂ともなりしとハ早雲の寺
号もようやく残り多る

○関東天文乱の事

兄しハ昔乱世なりしが源家のいきほひよわくして諸侯
与同して関東の公方古河の晴氏公上杉憲政と
一味して北条氏康と合戦し晴氏公うちまけ御

滅亡ハ天文年中のことゝ云傳へり。源家其氏々のまゝ
ゆんあくしてしたしきしれ。武士誉てそのうことより源氏の
末流わかれて分明ならず。されとあはれ此と
申傳ふるは、頼朝公より守邦公まで九代の君と
先代と云。足利治部大輔高氏公より義輝公まで
十三代の君と是を當家と申。高氏公ハ源家ありくとも八
幡太郎義家公の三男式部大輔義國公の末孫なり
よりわかれたり。左兵衛佐満兼公の御連枝勝光
院殿と申。満兼公の御息兵衛督持氏公長春院
殿是也。一男賢王殿、次男春王殿、三男安王殿

四男永寿王殿是也。永寿王殿成氏生涯の時節、信濃の
國へ落給ふを大井殿扶助申されしを、後に越後の長尾
左衛門入道昌賢、父子に誓して関八州よりかまくらへむかへとる
無双の者なりければ、此人ハ永寿王殿と上杉公方とよりあはずなり。
天氣をうかがひ、四位に任じ成氏。乾亨院殿と申是也。成氏公
の一男左馬頭政氏公、政氏の嫡子高基と、熊野堂殿と
申。高基公の長男晴氏公是ハ高氏公より十代持氏
公より是ハ五代目也。古河の公方と申ス也。又同ていもく上杉
家の系図ハ河の時代より是しらず。源平藤橘ハ流ま
る氏多くありといへども先士はいへて上杉殿ハ藤原氏なり

此先祖と申るは。宗尊親王二年。鎌倉へ御下向の時は
供奉として勧修寺の重房公は供として下向の時。丹州
上杉の庄を給わり。武家となり下向。修理大夫と左馬頭に
任ぜらる。其氏重房。足利治部大輔頼氏と聟となる。然処
に伊与守家時は上杉修理亮重房の孫子也。重房の嫡
男。揚り頭(?)能重法名(?)一峯といふ。文武二道のかまれ
ある人なり。頼重の嫡子。兵庫助憲房法名道欣(?)道号
雪渓といふ。丹州にて。瑞光院殿といふ。永徳(?)にて
杉谷殿といふ。尊氏公は親族なるに依て。他(?)同心なり。建(?)
条河原の合戦にて討死し給ふ。かの嫡男民部大夫

かの安房守憲顕法名乃昌(?)道号は佳山といふ。武
州代上州。豆州。越後三ヶ国を知行し給ふ。関東
管領職のはじめなり。応安元年戊申九月廿日
いかにして伊豆の国にて国清寺と立給ふ。国清寺
殿とす也。憲顕の嫡男。兵庫助憲将は其の後
少輔憲(?)へ管領職と譲り給ふ。敬堂道僕(?)報恩
寺殿といふなり。次に今(?)安房守憲方。康暦
元年己未四月廿日管領職と給わりたまふ。
山内とよばれしとぞ。応永元年甲戌十月廿四日六十歳
にて逝去なりし。道号天樹。法名乃合(?)。明月院殿

是なり。これ次憲方の嫡男安房守憲定。應永十二
年八月十七日。管領職を給わり同十九年壬辰十二
月十八日。三十八歳にして死去。大全長基先照寺殿
是也。これ次右衛門佐氏憲。二ケ年管領職なり。法名
禅秀。これ次安房守憲基。應永二十三年五月十八日。
管領職を給わりける。同二十五年正月四日。二十四歳にして
逝去す。法名心元勝宗徳院殿是也。これ次安房守憲実
是ハ越中の民部大輔房実の次男。憲基の養子なり。
六歳の時関東へ越山あり。これ後持氏公に逆心の人なりと。
子息二人あり。二男龍若丸とて伊豆のおくに。捨させとき

徳丹清巌と申人となり給ふ。上方へ行脚し。應仁元
年丁亥。周防国にをいて逝去し給ふ。号岳長棟
庵主是なり。次に右京亮憲忠。是ハ長棟の二男。
享徳三年十二月廿七日。鎌倉の西御門にて。御生
涯なり。大部長鈞真雲院殿是なり。然るに西御門
憲忠を誅し給ふ。根本とハ持氏御生害の御時。
成氏公。永寿丸とて。信濃へ落行給ふ。憲忠ハ龍
若丸とて。伊豆の国にまします。さて関東に主
なくてハいかゞとて。入道昌賢。永寿丸殿を
元立御元服なし。かくて主君にあふぎ奉り。同龍若丸

憲忠をとも引出し。天下一統ありて。国家安泰也。
然ば成氏公先年持氏公御生害の野心をふくミし
故に。憲忠を誅せし所に。此時又上杉わかれて。日来の
善合戦も。上杉の一家長尾一類。綱渡し。論有と
日月の旗をかゝげしかども。いさかひやまざりければ。
成氏公かなはずして。古河へ御馬をへうけ。其後
成氏公関東の公方と号しも。越州上杉民部大輔所
定ハ治国のみちあれハ。万民をなつけんせん
ざめ和睦なりけれハ。関東一統になる。文武
家の六条畠ハ。外民よりも以来を絶し。和漢合運

を慶長十六歳までを絶せる明鏡也。相模の国持氏
公は滅亡し。関東乱国の源。上杉家の事をも記
記し置ける。右の二文にはわれ遠
からし。是れは見集の題号に記しける。
古は鎌倉山内の殿足利の定正。此扇上杉家
を関東諸侍の棟梁として。旦
分てそれぞれ。上扇上杉家の中。不和ありて。
東西南北に争をおこし。合戦も公方政氏公を
修理大夫定正と。定と
これしも時節駿州に伊勢新九郎氏茂也

いひて文武智謀の仁なり。後ハ北條早雲庵主
と號し名をとゞむる人なり。上杉のかたうどと成て天命の
あらたなるによりて延徳年中に軍兵を率し
もよせ来つて伊豆の國を切て足利明嘉の時茂を攝
の國に打入それより鎌倉をとりしが氏直公ハ病死
跡目ハ高朝を討まで後早雲子息氏綱
時代に至て上杉朝定をかぎりし武州總州
を手にとりけ関八州に猛威をふるふ氏綱
よる基公の一男晴氏公をえらび公方にあふぎむこ
君にたて總州古河に仕付氏綱ハ下總の國

小弓の御所義明公父子をかぎりし氏綱子息氏康
時代に上杉憲政とかぎりし事なし。然所に
古河の晴氏公憲政と一味あつて武州河越の城をせ
めらる氏康武州へ出馬し河越の鉄にとりて天文
十五年正月廿日合戦し氏康討勝おほくを
かぎりしそれより以来関東公方そへたまる
上杉の家を滅亡と天文乱といひ傳ふる所こぞる
ことなり

○上杉朝定を生捕事

聞しむかし武州河越の鉄にをいて先年上杉

五郎朝定と北條氏綱合戦ハ天文六年七月十
五日なり。朝定うちまけ滅亡しぬれバ敵の軍
兵とも深くもとりこを中に上杉左近大夫朝成の郎
従わづかに残りとゞまりし討死せしを惜て朝成たゞか
ぐのかくれにとのかまへ移りて後みな一騎に成て。
落行所に相模国の住人平岩隼人正重吉
是を見てかけつけわれ大将と見てそれ敵
あしかるとあやなくも見せ給ふものか引返し勝
負せよ。名家のくわが朝成ののがれかねて。駒
引返し隼人正馬上にてくんで落しめハ隼

人正下に成しが。えいやと起あがり上になりけるを味方
小山田兵部丞と云る者落合郎にわしり来て敵を生捕隼
人正にかせてうちつれて氏綱の前へ参り
其由を申隼人正来て此敵とかれがしらずと見せ給ふ
ぬるぞ兵部丞行くさきをまちうけひかへし相論に及ぶ
氏綱も其者のおもての色を見る鬢の毛を記
し置れ生捕をば山角伝兵衛に預らるゝ此由を人相
論決せず没しかるに生捕に向て問ひけるも。
朝成にむかひて其方を捕へし者は。誰なるぞと問ければ
左近大夫朝成は上杉修理大夫朝興のおとゝ。朝定のおぢ

ちうちくにもむしほへと仰付られけり。合戦の後。氏経河
越の国へ入給ひぬ。伝にいはく。胡成の居西へ来りけるが。昔を
偲ぶかたくさいぬ。頼朝公奥州へおはしける事を偲ぶ所
ま。胡成いまた我身みちのくへ。合戦の事古記にも
くはしく見えたれど。いかなる文にありしとさたするやとふ。
伝へきるいはく。或老士の物語をきゝたりしは。治りそれ
以前にくにとなくさかりにし頼朝公奥州泰衡追治
として。文治五年七月十九日鎌倉を打立八月十日
あつかし山の合戦に打勝て秀衡が子どもを志
ちうちろしかも人しいひとに切らて陣が岡にまします所

志陀にて九月七日に宇佐美平次実政泰衡が郎
従由利八郎を生捕りて陣が岡に参上す。
然に天野右馬允則景是を生捕のよし論ず。二
人の申所に違ひの事あれば。両人の馬并に装束の事
を尋られ。とて後。梶原平三景時由利に向
て。いはく汝は泰衡が郎従の中に名ある者也。
何の色の装束着る者の汝を生捕しぞといふ。
由利答て。汝は兵衛佐殿の家人か。今の口状過
分の至り。たとへんとかるに物なし。故御館は秀
郷将軍の嫡流の正統として上三代鎮守府

御の将軍のおもむきをくむ。駿河守入道ハ、はたらくのおもむき
きの合戦をバ、はやくへりくだれども、きらんや又駿河と我と。
それにまかりのぼりしハ、ただきわ勝劣わからんや。運にさて
囚人となる八勇士の名たり。鎌倉殿の家人をバ
ござくしいでおもてもその条むれりて、それたし。問
我の事ざうらハ返答によりよそどものぞとこそ。景時も
おかりたりてしとおかめけるおよぶ来しては、いはくは
男悪口の科。別の合諸たる紀の名。糺明せんとも
なりにおよばしていままへ給はく。おれをおもいをも
お門て囚人をとるとむるる。もて理達するやく
畠山次郎重忠に是をきしと、はなくべしそのれむ
御重忠ハそれより数度の儀をとれば弓矢の名を揚来て
座せしめ礼をとりてあらはしていざなへていたらく
弓矢にまぎを門さかる者なんでもさのごとくまさり
もろこしを漢家なりの朝のはじめざたりま。かなしても
恥辱をせうしどへりとも中にをいて古左典厩永
暦に横死あり。一代もなく囚人と成て六ならるに
むりしめ給ひ。諸白豆別に配流せられ給ふに独
徒運に昇によりむなしども天下をれ給ふ寛容
生捕の名をかりしもしむといふなり。給ふ後ちんりし

乃眼にも残すべからず所なく六親の中より貴客
武将のかゞみ也それをその筋の人にまかせしもてさ
名をとゞむるの君。勇士本勤功をきてんぜらるゝは
客をかゝはえられ自然とひよ和海よとよぶり
まけて。治ひといひ。馬の毛付といひをりんねられ
らが。浮沈は事とさいむべきまで也。何色のよろひ
を着てはなる者は生ずるれ然ふぞや。多めに是を
やめるべしとて。いまだ便利がいまく。客は白山嶽
之。とふれ法を存じ。前の男が。さくいくいふ似たと。
危是をやべし。黒糸おどしの鎧をきる。麻毛の

馬に乗りたる者は殿是を取て引たてよ。後に入来
る者ありてしらふして参りひとつひとく。金忠海
氣せしめ。浮ぶさまは卦を披露す。件の係は馬を
実政が也とて。不審をひられとりんね次に仰に
いかくは男の所状とありて心中のよふかんと察しを
者也。給ふ必べきまかせ。前に乞ふしとべし。てなれば
金忠又是を相具して。未上にて幕とやまかれ是を
見給ひ。仰にいかく其のが主人養衡が威勢と安国
のるまかるひ。刑をくりかるの条。難義のむしとだ偽し
めとのあかりよの従は九郎経たかるの九に河田次郎に

人の為に誅せられ跡をうしなへり。凡五国を管領し、十七万
騎の魁首たりしが、百日にもたらず廿日の中に一族皆
滅亡せしハ、ふしぎにおそろしき事也。由利ハていくら…の
郎従わくねまでもみな一度に首をとられ、壮士ハ乞食のことくなりて
或ハ乱軍ハ行歩進退なりがたきにより、不意に
自殺をとげ、或ハ不肖の身にしてかへつて生すくらるゝもの
あり。兵後にわかにたすけなる者なし。抑故左馬頭殿ハ海内十
五ヶ国を管領せしめ給ふといへども、平治逆乱の時一日ときの
間にして零落し、数万騎のものどもみなちりぢりとなりて、尾張国長田
庄司が為に犬死して誅せられ給ふ。いはんや…甲

いはんや泰衡管領せし所ハ、わづかの地にして、あまたの勇士なり。
数十ヶ日のあひだにいくさをし、一度も不覚をとらず
おもふまゝにせしめ給ふ事ありしかども、生死二つなし、終に幕
とられ給ひぬ。由利ハ赤心の忠にて鎌倉殿に訴へ、忠義をとかく
申されしかバ、給はり、まことに由利八郎が忠節に感じ
見よりかんのからまれるをはなれてなり。但兵具をゆる
されたる事もなし。誠に由利八郎がとがむべき事也。故に由利
八郎、頼朝公家の物にもとめ、誉を後の世までとゞむる道理を
しり、主人の名をもけがさず、男として勇士の
まれなるもの、末代に名をとゞめ、希代の剛者なり。

扨そこ川ゟ生捕のさゞ浪とゞまり氣ゟつく事
㝡べしもとより朝敵かいけどり生捕の昔ゟ今に付
てを遠根なんとなし深く無事しとれりへども
兼運命にて合戦ゟ勝利をうかひ落所に
よりて草威の鐙をゑがしもの馬に帯ぶかの武者一
騎名乗てかゝりくるのゝ駒引寄て馬上にかくる
かまへさしくてまくとりてとり兼て上ゟよるてる
上よる落ちきりされた袖の鞍ともせむきまとくふ
せ力よりとけしおりゆるゑゐやとせうしみし朝
敵下よりかゝりねともやまく落合かさなりて生捕ま

恥辱をさらす事。無念口おしさとぞ。結構ある民部
いよいよ上民部少輔の子孫の馬へ平岩隼人
なるぞ此る云兼る従うりてとも恩威ゝく人と
ゐうとわてとこかゝる民部いとくうまて生捕
ようしと朝敵よ好る事かくこさうぐ事をしてまとを
かくの紹るを結構等むしの生捕を語り朝敵
とやまめでそうる智略を國し給へり

○小田原小條家旗馬志るしの事

凡し皆小條氏来る時代関八刕の武士の旗家々
旗ある紋を付る物は一代によかるとて

さるが故にくのさし物。孝恭の紋なれば是を絶て我指
物に似たる紋なりとて他の家中にはとかうもいふとも
来を為孫とかもしろく上がまれなくして異様など
のことく際にも紋のさし物をかんざく人ハかぎらるる故
力に通じたるとさしたる故に民康ハ赤旗十なら
まぜころころの大四方一半あり。馬じるしハ四文なり。
嘴くの大のかりなり。民政ハ白地に鑊湯無冷所と云文
字をかかり。民直ハ金地に無の一字を書きたるにさ
まざま民直旗竿の弓大なり。鈴木大学助と云もの
ありけり。精兵の大矢ためと引上げの名をあたへたりき

数度の合戦に先をかけかまれをわしにもなかりや白地の
さし物にやりといふ二字を仮名に書たる人是を見て。
鈴木大学助ハ旗竿の弓大将にて関八州に比類なき
射手なれバ弓といふべし。弓と書ていか子細ぞ
鑓と書事推参なりとてしかりけれバ其
とがむる人ハ太田十郎家中。武蔵国岩付の住人なる
薄目右衛門と云者大学に向て。吾方鑓ハ旗竿
の鑓。関東の鑓と名ある大学旗竿の鑓と答ふ。薄目右衛門
やがて旗竿の鑓よとぞいへバ是非なしやとして止
薄目右衛門とて関東の鑓と名付人あるべからず候ま

巌流と呼ける。皆人ハ学て大学がやり。薄目左衛門
小とがめしき。関東の鑓と云るハ大学が鑓を以
猫啼ともそれ名付べかれと。難せしが小田原籠城の時
苑大学ハ玉縄とり口の役所によりて矢倉へ目こかる
見。敵と目の下に見て。松井大学次し。矢出つる程
書付せなけ矢にわざ矢ハ一ツとなし。人云それ大将
射まる。万人に勝るゝと専とも敵の鉄炮にかくて
おもてへ出る事し。鬼蠟の火によへりけしと。いさめゝれども
大学身ひさゝりしと。敵大学とうそんとんかけり
終に鉄炮にあたりて。果ける扨又小幡左衛門太夫

家中に相州玉縄の住人。三好孫太郎といふ勇士ある
さし物に挑燈を七ツ付しを孫太郎が七挑燈といひしく。
かくれなし。爰に松田肥後がもとに山下民部左
衛門村がさし物ハ六ちやうちんなり。天正十三年の秋民
部左衛門義宜下野の国にをいて對陣をはりたる
おひの時苑民部左衛門が六挑燈のさし物を孫太郎見
て。馬を寄しせ。七方さし物に子細あり。とこふ民
部左衛門きゝて。挑燈に何の子細かあらん。我この
いふ孫太郎いそく武功をはげまして六挑燈さしが
うらしぞれ天文十五年の頃から小上杉と氏康と。武

別よそ合戦のみさせ。其上妻鏡のかきまれわ
やうく民康よりかぶりの感状あれども、鉄一桃挑を
さうそうらぬ後又忠ろく二つちやうちんとさせ。二度
切ろく三ッさうし生前又六度七度忠勤をなさんで。
手つくの切よりて七ッ桃挑とさせがうぶゆへ小勝太郎
が七桃挑と名付。閑八刕よそ眼ろべくじぼ。そうびま
馬上ありく問答し、ほうぶと目のせりわひいくさう。佐
竹ぐよ大石八郎と名乗て、陸奥のさうし物とさし。
絵人よ先立。ばれとれもらん者あらぱぐんで勝負
と決せよと。太刀ありく切てまつろ所に民部丸悪せせ

あれせ馬よりとらんで、落民部丸か求門大力なれバ八郎。
とうこうせ首を切てこそ場ありく乱と点じる。
桃挑とみ引切て捨一ッ桃挑とさうしありしが皆人
是をみて民部丸か求門が問答の時白をさうさ
せどゆかれとわうりし二ッ桃挑させ事。かゝ切で
さとくならぱ小勝太郎が武勇ありもあらべしと皆
かゝひせらぬ日の軍へみられ首をとりつつられつ
まわる時ひしぐわつりしていさとれぞ。安陣う
かへありぱ小勝ぐる黒色精丈といふ名備のさし
物をさしありきの敵とみてうぱ首一ツありく伐

陣よりかゞる差物を見れば、われ敵にまどはれ無念なりや
おりひらん首引さげ馬よせ打て、又敵陣へも
せむかふ味方を不審しあまりやくとかく敵を
見とがめてくんぐわりの侍とも詰寄て敵陣にかけ来
馬をひかへ大音あげ其郷見へ下総国の住人思ア
指物見先陣のかけよといそぎ敵ともある上まくらん
て落首取ぞらしが残さし物を見れおとしたる
級は猪なりば首へいまだ吉川かんにあらせ共様々は
くは首とさし物にまかれて首かしとりに敵見とも
見て、やさしきかんじ其の侍れとひろひそろ楼の者

物を見よ物らく武者一揆楽出し込さんといふ指
物をよけくとてかの差志よさし首へさしてたへと馬の
口を引とらしろむかうて敵にまさてせさせて首を
取り味方の陣へかへり今敵も味方も希代の剛
の者なりとかんしんせり

○秀吉公関東発向の事

見しかれば天正十年六月二日の事なりしに明智
日向守光秀謀叛を企主君信長公
信忠つ父子をうつて天下を乱も羽柴筑前守秀
吉を世末て同月十三日惟任をうちて後又天下

とかくて。柴田修理亮勝家と合戦し。秀吉うち
勝て。勝家をかほろぼし。家乱を手ぬめ治世となる。
此威武道ようつらひ給ひしかハ。北國西國の大名ハ
家ぐく京都へ上せ参じて。みなひざを
かゞめし君の御まへにしたがはんとせざる人ハ
なかりけり。西ハ島つ東ハ北条ならでハ服せ
ざるといふ事なし。一天下おほかた其下知に
従へり。ここに北条左京大夫平氏直ハ。東八ケ國の主
護たり。秀吉公京都よりとて義兵をおこし闕
白に任じ。武将のくらゐに付給ふ由承及び。号

夫の礼義をわすれたるか。名代として北条美濃守氏
規を上せしむる所ハ。後氏直上洛すべきよし。沼田
左衛門監津田隼人正を以て使者と下さる。氏
直是を突返にひしけ給ひ名文の秩國よそれて秀吉
よりも。遠境をもわづらしとぞ。先祖の早雲ハもし
元ハ武勇の家に生れ弓箭を常ともちたり。
武略をもって伊豆相模を切て取。後東八ケ
國を静謐に治め。氏直まで五代世継を以た
普天の下。王地にあらずといふ事なし。勅命にそむい
てハ率土の内ハへし。擬又氏直も天下のらちを除てる

ときに其使札をくハへられし。関東のぞミにまかせゐさん
人ハ雖然かゝるべしと也ど。武勇をもつて天下をおさめたまひは
勝負を決し。運命をバ天にまかすべしと。返答あり
秀吉公ひさしくおもへらく。以後おそろしき事か。我
聞夷の淫乱をこのむゆへ。國家の太平をいのらんや武将
の道をうしなひける恵也。古人も一人の天下にあらずと也。
天下の天下なりと云り。國の乱をこのむ者ハ天のせめ
をやかうむらん。民直をふせぐとして。秀吉公関東へ発向ある
しハ天正十八寅の年三月十九日。京都を打立給ふ
いそかひさ是非の陽気に向て。威をふるふかなし

同廿七日前将駿河のさくひ沼津に付。秀吉公ハ浮
原に着御。後陣ハ駿府にあり。此中小田原へ寄
手のはたを引分ずして。民直公法勢をわかつて浮道へ
まていたくぞまもりける。道まさに遠くして治むべ
し。大山おかくぼへて大事なるんぜんとひろく左右にあこれ
たり目まじろふとも照して。治まりつく利害をせいすと。
もつて敵を討べしと思召。大閤が金なるもの上合戦
の勝負を多勢小勢にしよるといへども。軍士の心ざしを
一つにまとめるとのことハ。西國ハ大軍なりといへども
たかまへ秀吉こそやくいよいよそれぐんあくりや下な

寄合士卒なれバ、さんざんにしハ、おなじかれども、終に氏直関八
州の武士ハ五代家に従ひ、恩を国に浪を志てふ。
旧臣にも上ぱ数代の合戦に、強敵をなびかし、武略をいた
国を治め、令をかうんじ、義をたゞしんじ、一度も衰へせ
ど、君臣合体の勇士なれバ、さしもの敵百万騎ぱむかふとも
いかゞなりしかバ、唯雄を没せしゆゑべき数日をうつさせ。伊
豆国ハ河原が原、三嶋へとびくる、諸軍を打出一戦を
とげ、国家の運と秀吉の運と、天の照覧に任せ申べし
と下知しけるに、家老松田尾張守へ道々として
ハくらはぞれ名ねとハ難義の所とてしへて始

終の勝を心に懸るとして、文武の達人といへバ、へさ氏
政伊豆へ打出、合戦にをよばず事、善悪の二つに極ま
り、数ケの敵を引請、籠城にしくハなき、国勢の出陣
かけてけふまで百度ぞ籠城で百度勝を
いくさの善にあらず、たゞさしハせずして敵をくるしむる
を善の善なりとして、先孫子がいへども、上兵を
時に定る。ことハ安くしてもかの事を万代に残せし事ハ
かくしひとへに籠城あるべしと志さまに諫け中にお付
て、氏直出陣延引し、尾張ちか夜逆の時にも、いさか
ゐを氏直さしも直しけれど、運の末とや後ぞかし

去れ程に秀吉公。三月廿九日寅の刻。出勢有
日午の刻。豆州山中の城を。近江中納言先陣として
のりとり卯月朔日。箱根。足柄山をおとし。二日に小田原へ
おしよせる。氏直運命つきて。一いくさもせずして。
関八州の軍兵小田原に籠城する。並目の意そその
甲斐なし。生くの恥辱死ての遺恨後悔先にたゝず
も。絶てとえ大仏城要害にかまへ廣太なる事。西富士
と小嵐山はくさまり。二の山の間に三重の堀をかまへ
小嵐山を城中に入。早川の河をとりこむ。南の濱邊へ
きしまわし。石垣をつき。東は小八幡田の塀をほり築地を

仕る。東西へ五十町。南北へ七十町。廻りは八里四方に。
せいろう矢倉をたて。並とも塀さうりさまを
ひらき。天下にならびなき名城也。秀吉公は西の
高山に陣城をかまへ。小田原の城を見おろし。
其外の先陣。鳩津同前。犬友中国は毛利。むすびさ
吉川小早川を始として。加ト家その外々。谷
とおりに陣を左陣にさうて。北国越中ち
はの宿に浮田宰相近江中納言并に家中衆。
中村式部小輔。堀尾帯刀。一柳伊豆守。山内對馬
守。次に大柳少將松ケ嶋侍従。尾張内府たり

家中衆。酒井左衛門尉。天野周防守。土方勘兵衛尉。羽柴下総守。次に加藤左馬助。長宗我部。家康かたにハ家中衆。榊原式部大輔。大久保七郎右衛門尉。酒井左衛門尉。同宮内大夫。井伊兵部少輔。松平周防守。牧野右馬允。東南の濱際にぞ陣取。右陣ハ長谷川藤五郎。羽柴左衛門尉。池田三左衛門尉。脇坂中務。安房の里見左馬頭以西南の海ぎしまで陣す。後勢ハ堀ざかひまで押よせ。後陣ハ山際に寸土尺地のすきまもなかりけれバ天へ飛鳥もかけりける事もえず地をはしりのかくれんばかり。海上ハ四国九州西海の軍船数万艘の兵船こぎうかべ。浦の浪ろをも見えざりけるとぞまことに陸地のごとし。敵味方の鉄炮の鳴音ハ上ハうちやう下ハならくの底までもひゞくらん。然る。扨又伊豆の国より山の城ハ北條美濃守氏規。そこにこもりける。よせ手の先福島左衛門大夫。戸田民部少輔。蜂須賀阿波守。生駒雅楽頭。前野但馬守。伊賀の侍従とぞきこえし。都合其勢又万騎余くせめかゝる。同国下田の城ハ清水上野守たてこもりける。よせ手ハ伊勢

尾張。参河。遠江。駿河の。其ほか渡海し。伊豆津く
浦〻へ。舟をつけ。九鬼大隅守大将として。せめ〳〵。陸上
陸は松井田の城。あだは大将にて。駿河守こもりける。羽柴筑前
守大将として。長尾喜平次。直江。真田。都合五万
騎にてせめける。武州鉢形の城は。北條安房守。氏邦
出す。寄手は。浅野弾正大将として。木村常陸守。
家康卿の家中。本多中務。鳥居彦右衛門。平岩七之助
都合三万余騎にてせむる。扨関八州においてある
城〻は。大胡。小幡。伊勢崎。新田。金山。館林。箕輪。前橋
榛名。中。小泉。箕輪。本郷。白井。児玉。飯塚。立林。佐野

足利。壬生。宇都宮。茂木。小山。榎本。深谷。忍。越生。
松山。騎西。菖蒲。岩付。羽生。江戸。津久井。八王寺
甘縄。新井。三崎。浦賀。臺。嶋。関宿。小金。布川。
米村。助崎。孫子。布西。佐倉。臼井。椎津。飯田。万喜。
長南。池和田。東金。大多喜。八幡山。東金。山室。岩ヶ崎
守山。古河。土気。城戸。小久保。土浦。相馬。木颪。江戸崎。
栗橋。鷲宮。水海。此外城〻を数をしらず。寄手は。石
田治部少輔大将として。小国の出羽。陸奥州。伊
達次郎政宗。佐竹太郎義宣。都合十万余騎。
軍勢雲霞のごとく。せめ来る。関八州は乱。民

悪と数央し。城々よて責てくるひ。おりハ紀州ハ数万挺の鉄
炮の鳴音。天地もひゞきし。城籠者共ハ焦熱大
焦熱の炎のほのほにむせぶらんとぞ見へける。然よ秀
吉公ハ京都出勢二十万騎とぞ聞されしが。西国ハ
国の諸士。生気の者をとせ。かさなり。関八州。出
羽奥州の士卒。幕下よ付られハ都合の勢
五十万騎とぞ申しける。然よ小田原の城ハ三四ヶ
月よ及ぶせめよもよりハ。蔵の粮ともつきぬべく。然ども
堀をうち。玉薬へ加りて。矢倉ともうちくだきしかバ
九重ハ矢さけびのこゑ。止事なく。せむること又

城内にも東八ヶ国の軍兵。共にこもる。太田十郎。
北条七郎 同新太郎 同陸奥守 同左衛門尉 同右衛
門尉 同新三郎 同彦太郎。伊勢備中守。大和兵部
少輔。小笠原播磨守。松田尾張守入道 同左馬助 同肥
後守。山角上野守 同四郎左衛門尉 同左京亮。多
目権兵衛尉。山中主膳。福島伊賀守。石巻勘解
由。同下総守。南条山城守。同右京亮。同左馬允。小西
隼人正。富永内膳。大石左衛門尉。依田大膳。荒川
豊前守。大森甲斐守。清水太郎左衛門尉。妻田山岩
衛門尉。大道寺孫九郎。上田常陸守。酒井左衛門尉。

羽賀伊与守。朝倉右京亮。伊藤左馬允。大藤式部
少輔。原宮内少輔。荒木兵部。羽賀伯耆守。安中左
近将監。由比信濃守。長尾新六。小幡孫市。上田兵
衛太夫。成田下総守。内藤大和守。足利新六郎。小
泉兵衛太夫。佐倉筑後守。布川彦太郎。長南又郎。
倉賀野淡路守。高山城守。深谷左兵衛。大須賀
権太夫等。并に主水。立林喜平次。此外わきゝく泥し
かゞり鉄炮玉くもり。兵粮米ハ千年経るべきさ。
蓄へくの用意。やゝ一寸も然ども。ひかゝしうも。れ
ひそくしく城中くるくくハ。堅固ようて。天下
無双の名城。後へさてぞてなし。敵の旗軍。長陣
の氣もくりきれわさんれそて。かんとして秀吉公
りとようで。勇氣智謀ね兼くる。名将にてまします
せむゆくろハ。もして勝ると。めぐし後ふそれ氏
おわさ氏。義ふむんで命をおしむべさらわるもぞ松
こえへ九ナにのぞんで。とそれけりかるとと。傍んで
なとへ勇士九もるる可也投又上兵へもるるとと
くちら。与次へまじわると伐。与次へ兵を伐。与次ハ
城をせむるとゝく。知ある智略ともぐらす。民直
奈方。太田十郎。氏房ね口ハ城しるまし東井細田

口をかり、面せられ敵ハ羽柴下総守、此者中使
としてひさしくわづらひとぞ申て、久々氏房是用の
人をかろしと也。若輩の胸臆良将の謀計よりとどさ
まひとへにわづらひの依わり、和談をとをそへ伊豆相
摸武蔵三ケ国ハ前々のごとく、氏直取次せらるべき
事ハいさゝか違乱あるべからずと。終に対面せしむるの上ハ不
輿の契約とて後ざんれ明日家康へ馬をおさめ
らるべきよし、堅約の誓文を秀吉公直判をのせて
まとりんぬ。是によりて氏直秀吉公へ対面の。も
よりトわり石浜まで参る所のご即時に多勢ありて

てぐ怨んとかたへ意趣わりまし、似ぐろうかつさとを臨
の輩をりやすとうれはる氏直七月六日城中をか
出中宿ともにて尾張内府公の陣中へ入給ひね
北条家運のきはまるハ智者のいかでかんも兼見の紀
とぞでゝはなす成行事ハひとへに天のなせる所也。敵も
味方とも一味のなりひとなし。城中へ出へとろ所は
氏政切腹の旨使者を立てまきとりんぬ力をとふらて
とが城と下里、医師安栖が宅へ移りて給ひね
検使として石河備前守、蒔田権之助
榊原式部大夫康政と同月十一日。氏政切腹

舎弟美濃守氏規ハいかやうにも御免とをもてなし
自害せんとせられけるに肥後国の武士益海とらへて
其命を助かりけるはこれなりもとより源氏也同日陸奥守
氏照も切腹し給ひぬ小田原城請取は家康
家中には中務少輔榊原式部大輔井伊兵部
少輔へ被仰て関東の諸侍は道つきぬるへ
とかなしく討死しけるは単門よりあらずとも名を後
代に残さんとして恥をおもふ事千将千騎にもち
ひたし終りに秀吉公は奥州の仕置として黒
川迄出張し浅野弾正石田治部少輔大谷刑部

少輔にこれ三人に仰て奥州五十四郡の検地を
ありたかきせ秀吉公は黒川まで着御の先より引
返し給ひ駿府の城まで小田原落城一陣破れ残
党まいらせしも北条の一族を門葉国々の大名
俱に遠つかはさて勇気をうしなひ敵と出る時
節には名ぞ一命の助からん事をのみ願ひ義
を捨て子を捨親兄弟と落行ありさまし
かりける浅ましき也誠に大名のかれかるゝ世にまして恵も
時は翡翠の紅閨の内にありしも今は秋の八月を
めでつ九夜三伏のわれいさ秋の月かへさの風を報ふ

玄宗そせ川の冬の夜ハ雪を積かさね。盛の玉を
そよぎたりし。上臈達かちよくぶりしやくわのと
も流れさせむ。独りく身て。行きさ修より紅
緑袖と共に思ひ。家しこよなきまれなりしかげいさか
なりし人称ひし事。其れとへん御身そなたの色
皆世とその人は世に加はりし人君の名称も
のぞみし。逸士傳にいはく。許由といひし者は堯王
の時の人なり。許由九州の長とせんとの勅定なりき。
許由是を巣父に語る巣父がいはく汝こちを
隠し見せとかくさで我吾友にあらずと云て
名を洗ぐ。許由ちやうせんとせし流の水去て。わが
兎も巣父清冷水を飲くを耳を洗ふ所へ。樊仲父
といふ朋友牛を引て来り水をかはんとせし巣父
耳わらふを見て我牛の口穢れん事をとて
むで上の流へのぼせんと牛を引きて賢人
のふるくのふるしたふ山住は物さびしきものぞ
わかれた世のこゝろよりは住よかるべし。楊子法
言に鳴鶴でぬくしやさんそこらんと云り。
かれの事をぞんじせばこそ世をいとはざる我人
のんびりさなしすやと豊乱かさなれば行くべからず

人見てゆへて。人ハそのしらぬ人によりて見る世上せんハ
よき根なり。林野に骨をさらせし天人ハ。前生のよき
とく縁に逢びがんつらん。かかども、こを討し冥鬼ハ。前世
の悪を悲む見。善悪不二なりと。ほとけの行とく
人縁によりてすらに善男人の見る見男人のなすところ
なるべしと云り

○大也の道弓馬に達者の事

見しハ昔北条氏直公関八州に威をふるひ給ひ
し時ハ恐れぬ敵もなし。なびかぬ草木もなかりしが
武運末になり。天正十八寅の年。北条家
ことごとく滅亡し。関東諸侍たちハ運つきて果なのを
さすらへ行べきかたもなし。うきの餘に入道しけるが
つまじりてもとどろ腰刀世になきハまるなしと成
るとも古弁など口号にて侍るひの体にて家やし
おはさめしハ面をそむけて肩をとがめずまもなし
わらひ草ならもわらしけど。其行のぶんしお諸力ハ成
ぬけるとてもよりかかる古今の弁をふひ出侍るを
悲しきかなや。其のたびの人ハ知る人ハ智者なりとも
を君と上にあらんとかりもとど。徒なる人の
かえる家をあらひしやま朝夕の世路と渡らんと

孫なる中比も不便にかんじらる相模國乃住人和田
能登守といふ関東弓矢の時節殺戮乃合
戦よき先とかけ武勇に進せし者なりしが人をも
て名をしでも力ハ衰びえてわづか力さも小笹と云ひ
そそどもこれよりの古井と頌吟しつゝいかなるお
もかげや道し太也と名付けれやるもとむる
を見て此人やし名をいふ者もありしが何となく云
人をわ殊に乞食してぞ世を送りしがそれから力
の岸の根を旅てさそふ水わしとにくへしもいる
むとぞありし風情なる職の人云ひける代し肅太

也と名付とやしむるがしかも犬と書ては盗人
をせぐ盗人なるを知て吠ざるの犬と飼へるも
此東坡ハかゝりし者にて云義と信じて名付たるにや
是へ逸物乃大なる須とさるは益あるべしとある
結城宰相秀康つねに仰せけるハ弓箭治りて天下太
平の御代なれど人の晏子春秋に難有とのぞんで
井と論し愚人のわざなりと演せられしがゆへ天
水乃ともしひこそ武具を求むる是君子の
道なりと申し関東弓矢の時節武のかまれる者
をるる子出し扱ひし始に清水太郎左衛門へ道灌か

四郎右衛門入道。山本信濃入道。梶原三九右衛門入道。
朝倉讃岐守入道。此五人ハ文武に達し。一人当千のものゝ
名をえたる勇士。年ハ六十七十ばかりとみえけるが
智謀ありしかバ。常に御前に近習して。目を懸らる
或人ハ是を称して。むかし四皓秦の乱をさけて。商
山といふ山に隠居し。八十有余鬚眉皓白なるを
もつて四皓といへり。漢の高祖の太子。ゆへありて此四人を召
て師とし給ひしに。しばらく治世へかりき。源氏
物語などにも。むかしもきこえけるとなん見えたり
なりといふ。又秀康に世を捨られたる老士を召出されて

職せられたり。秀康つたへきかせられ。関東にハ馬上無双の
達者ども。そこかしこにあつまり。わざを琢しけるを好ミ
給ひ。鈴金大也郎。関東きつての乗手にて
こま馬ともにのりまはし。胆力すぐれたる馬をのり
たりし。家にハ無究旧友なる伊奈兵庫助とて。馬術
練の勇士なりしが。或時口論して。大きに老人を。大に技
おつる紀馬。このものハ不覚なるべしと思ひ
するに馬はつよき馬このむと見えて。馬ははなはだのりて
馬よりおつるといへども。頼朝公の前にて流鏑
推参物語りにて。合戦事を語らるなり。

大庭平太景能、保元の合戦の事を語る。申して曰く
おゝていちく、勇士の志、用べき物は弓矢の寸
尺、騎馬の学びなり。鎮西八郎は我朝無双の弓
矢の達者なり。然ども弓箭の寸法を案ずる
に、ちと涯分にすぎたり。其故は大炊御門の河原に
て、景能八郎が弓手に出、八郎弓をひかん
とす。然ども鎮西より出られし故、騎馬の時弓いさゝか
心ままならず。景能は東国にてよく馬にのる
なるによて、やがて八郎が妻手にはせめぐ
る時、ほとんど弓の下をくゞり、ゆるふとよんで

身にあたるべきの矢ひざにあたりていぬ。此故に景能は
存命す。かゝれば勇士の用ふべきは、たゞ勇士是
を学ぶべきは騎馬にとゞむべき事也。壮子等耳の底にとゞめ
ごじべし。荒涼の説、嘲哢する事なかれといふ。当
座みる耳を驚かし、感歎の色をかうむるところ。され
ば治承の源平のあらそひ、足利又太郎忠綱、宇治川をわた
るときは、さ馬をば下てにみなして、ゆるやかに水をわた
せしが、今日に至るまで其名をしるべき事也。梅又
佐々木梶原も、食場の所をかんじて、馳るものゝ
宇治川の先陣、伝ふるも御しかるべし。御先、大河

そのことをかうれ事一得をおもひて多失をわするゝ
弓箭の家に生れたる人も馬をしんまん仕なるゝや。
武者修行とて馬をとこせ道あるに弓を引矢
をもならべと見てならひそれある小家で遠流す行
歩道を休みんため軍中ふかく家は馬上ふかく弓
鑓を用ゐる人こそなるがおもむし關東にて戰
場をもいまだ踏ざる若き者は廣き野を駈まはる。
ことなればたゞ敵味方とも人数をわかち備へとさす。
弓鑓長刀をのこしかえての衆を揃へ馬
小家あるのもあらんため。鉄炮をならし矢さけび

の數々をしかるべし。あゆみさかえ時はいさんでたとむ
わかちれて若さもなど流さでしたへさせ給ふ。あるわ
是より家上祖の名けるを家法とせず自由ども
えらくくなれども。鍛練をして先陣にすゝんで弓引
達者をも見へば勝利を得ん事を尊き騎道
數の二十一ヶ條の内に馬は下地を達者にまかす
ひて。用の事を經験とて稽古せしと違はず。用ひる者
の口つき。もとのは一代の不覚なり。經初の馬上あるし名利
をあらはれ。家方をもかけつ。大事をまもりて一代の口
ともどもをはかるべし。弓馬のかけた紀

人々も指をさしけり。永禄七年甲子正月八日下
総国府台にをいて里見義弘と氏康合
戦の砌。氏康国府台をわたしてかゝれと、いさめ下知せら
れしかバ。まつしぐらにでゝ敵味方入乱たゝかふ時に、ふるく
氏康が家老と名付しお黒の馬に乗。一そりそ
川そそる白柄の長刀ふくらかにて剛敵を三十余
騎切ておとし。猛威をふるひ。合戦に勝利を元
あまたひ惣じて氏康かゝる鑓刀疵七ヶ所かう
さゝらに太刀疵をかうむりゆへに。さるひのおりて
疵とハ人かゝびきて氏康こそともいひし。馬

鍛錬の儀ハ。比前に後もろくいにしへの傍輩たちよく
存ずる事なく。此比馬ありへしとやくれバ。秀康ハ
其上に久世も若きさかりへさそで馬そちんまん志けるん。
むかしの面影とおもしとまなんで見せよかしと作る。
久世殿くて。当老七十に及び。ある上のうちもひけひ
かくハ。然ども老命辞しかねて恐れわ里。
此馬具によそといへ共なまるんで此目に受けべ
しと申いこのあるよ私宅に帰り。秀康公ハ此見物の
ため。馬場にゆりとかでせよらせ給ひ待給ふ
上におかゝ居たまへり。久世月毛の駒にて心利の

纓引兜甲の上に頭巾かけて。白袈裟をかけ。ひ
せき山伏のさまなり。出立矢をひら胡籙おく。即ち一
人ありし。鑓を提させ馬に打乗て。御前ちかく志
ばしとわれて。せ軍陣に下馬。見えしとも
かへしての弓場を二三遍まはしめぐり。弓場のまへにかけ
築地のきはを敵方としまかるに。のりて緒を跡
の鞍の前輪に打かけ。まつ先ありて馬を乗弓にまかせて
たき数々をうけ。しろうしろに矢を二つ三つも
樹弓をもって抱ても。指抜き鑓おつ取て
がんさきくあへ。先陣を追かけ扱がときて見せ

ありぞかし。馬もふるひをさへとぞ。又打
家て。いさんばかりしせ。弓手に妻手へ鑓と自由
自在にまはしたまはせ廻るを。秀康公の御覧ありて。目
をどろかし給ひ。御感なのめならず。大力の名を
まびかれば。馬を志ずめて乗
御龍も当時の御褒美として。刀に長刀をさし
そへ下さる。其後のなりひ出
名大也への老輝の飛なれたんまんの道
若とつきまに事。若さがさぞやと。諸人かんさん
せしとは事なし。誠に老の人なりと

其流をつたへ尊崇し給ふ弓馬の威徳の流
くむべしとぞ

北條五代記巻一之終